

氏名	ほんだあかり 本多朱里
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第307号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	柳亭種彦読本の研究

(主査)
論文調査委員 教授 大谷雅夫 教授 木田章義 助教授 大槻 信

論文内容の要旨

柳亭種彦(1783~1842)は、江戸時代後期を代表する戯作者の一人であり、合巻『修紫田舎源氏』の作者として有名である。これまでの種彦研究では、合巻作者としての部分ばかりが目され、彼の作家活動の前半、読本を執筆していた時期である文化年間(1804~1817)の活動については、ほとんど顧みられることがなかった。“種彦は読本に失敗し、合巻に活動をうつした”という説が定着し、このために、彼の読本作品には見るべきものがないとして片づけられてきてしまったのである。しかし、種彦の読本は、本当に失敗だったのだろうか。

本論文は、読本作品を中心とした、文化年間の種彦の活動について研究したものである。

第一章「江戸読本概説」では、近世小説の中で、最も知的で格調高い小説とされる読本の歴史について概説し、本論文で用いる「江戸読本」という語について規定した。

第二章「『近世怪談霜夜星』における京伝の影響」では、種彦の処女作『近世怪談霜夜星』を取り上げる。これまで、種彦の作品は、先輩作家である山東京伝の作風に似ているといわれてきたが、このことについて、具体的に検討されたことはなかった。そこで、本章では、まず、『近世怪談霜夜星』のうち、京伝の作品から趣向を得たと思われる部分を指摘した。この作品が、京伝作品から非常に多くのものを得ていることがわかり、特に、京伝読本の第二作目である『復讐奇談安積沼』の影響が大きいことが明らかになった。単に趣向を得ただけでなく、その構成までも『復讐奇談安積沼』に負っていることがわかる。種彦は、京伝作品から直接的に影響を受けて誕生した作家だといえるのである。

第三章「京伝の影響からみる種彦読本の特徴」では、前章に引き続き、その後の作品に見られる京伝の影響を検討した。ここでは、種彦読本のうち、中期に書かれた『浅間嶽面影草紙』を中心に取り上げる。本作は、様々に趣向が凝らされた面白い作品であり、当時の評価も高く、後には演劇に改作された。この作品にも、処女作『近世怪談霜夜星』と同じように、京伝作品から趣向を摂取している。特に、京伝読本の第四作目、『桜姫全伝曙草紙』からの影響が大きい。この作品から多くの趣向を得ているうえ、悪の女主人公の造形に刺激を受け、同様の人物を登場させている。種彦は、特に女性の犯す悪やそれに対する怨霊の復讐を好み、その残酷性をより強調することによって、自身の特徴を作り上げたのである。また、種彦は、京伝と同様に、物語を、御家騒動や敵討など、江戸読本に典型的な枠組みに取り込んでしまうことなく、女性達の私的な感情をそのままに描き、それを事件の直接の動機として物語を展開させている。このことは、『浅間嶽面影草紙』だけでなく、種彦読本全般に共通しており、彼の読本の特徴の一つといえるのである。このように、処女作の後も、京伝の作品は種彦に影響し続けた。ただし、処女作の頃とは違い、後のものでは、無作為に趣向や構成を得てはならず、その摂取は、より深い作品理解の上でなされていることがわかるのである。

第四章「種彦読本の演劇的特徴」では、種彦読本の演劇性について考える。種彦の読本は、一般的に「演劇趣味が濃い」「演劇的である」と評されるが、これについて具体的に検討されたことはなかった。そこで、本章では、最も演劇色が濃いとされる、最後の読本『緞手摺昔木偶』をもとに種彦作品の演劇的特徴を示し、これが、他の作品にはどのように見られ

るのか、演劇の取り入れ方はどのように変化していったのかを探った。種彦作品の演劇的要素としては、①序文等で演劇を趣向の種としたことを謳う。②演劇作品を典拠としている。③演劇的表現を用いる。④演劇特有の演出を用いる。という、大きく分けて四つの要素が指摘できる。これが、作品の中に見られるか否か、作品の成立順に見たところ、演劇的要素のあらわれ方に大きな差があることが明らかになった。つまり、彼の読本は前期五作品、後期三作品という、二期にわけることができ、前期に比べ、後期の作品では演劇色が非常に濃いことがわかったのである。では、後期になって、演劇的要素が急に増したのは何故だろうか、その原因について考察した。まず、前期作品と後期作品の間の休筆期間の出来事に注目した。種彦の日記から、この期間に浄瑠璃院本を非常に多く読んでいたことがわかった。また、丁度この頃、種彦は演劇色の濃いジャンルである合巻を、初めて執筆しているのである。この浄瑠璃本の多読と、合巻執筆の経験が、彼の読本の作風に大きく影響し、変化をもたらしたと考えられる。種彦の読本の特徴として、高く評価されている文体の美しさも、このように演劇を積極的に取り入れることによって作り出されたものであるといえるだろう。

第五章「転換期の種彦」では、種彦が演劇的要素を溶け込ませた読本を確立させつつあった時期の、彼の交友関係を明らかにし、この頃に生まれた、画工や版元とのつながりが、後に種彦が合巻界の第一人者となるに大きく影響したであろうことを指摘した。本章では、まず、後期作品の初作『勢田橋竜女本地』に着目し、この成立事情について考察した。この作品の画工は葛飾北斎であるが、この時期の種彦の日記をみると、種彦と北斎は、単なる仕事上の付き合いだけでなく、お互いに訪問し合い、遊んだり、作品の構想について話し合うなど、深く交流していたことがわかる。また、本作に関係している酔月壺龍という人物を探ることによって、この作品が版元西村屋与八から出されることになったのも、北斎の力が働いていたであろうことがわかった。この時に生まれた西村屋与八との関係は、その後の種彦にとって大変重要なものとなった。そもそも、当時の出版には、版元のプロデュースが大きく関わっていたといわれるが、特に西村屋与八は、新案を作者に提供することができる優秀な版元であった。彼の元で出せたからこそ、『勢田橋竜女本地』は魅力ある作品として誕生したのであるし、種彦が後に合巻へ活動の中心を移し、合巻界の権威と讃えられるまでに成長したのも、この西村屋与八の存在があったからこそである。北斎や西村屋与八と出会い、交流を深めた、『勢田橋竜女本地』刊行の文化八年（1811）ごろが、彼の著作活動において、一つの転換点であったといえよう。

第六章「読本から合巻へ」では、これまで“種彦は読本に失敗したために合巻に活動の中心を移した”と言われてきた定説に対し、疑問を投げかけた。この説には根拠がなく、特に、“種彦には読本執筆の才能がなかった”とする伊狩章氏の説は疑わしいものである。そこで、種彦が読本から合巻へ活動の中心を移した原因について、新たな見解を提示するべく、彼が最後の読本作品を出した文化十年（1813）を中心に、当時の江戸読本の出版事情、文化年間の江戸読本の刊行数や版元の動向について調査した。まず、種彦が執筆していたような中編読本は、この時期からほとんど出されなくなっていたことがわかった。これには、江戸読本の長編化や合巻の流行が関係していると思われる。また、この頃、江戸の版元に移り変わりが起こっており、種彦がそれまで関わっていた版元は、文化十年頃を境として中編読本の刊行から遠ざかっていることがわかる。以上のことから推測すれば、読本作家として活動してきた種彦は、西村屋与八との出会いもあって、合巻を書き始め、これが大評判を得た。一方、彼が得意としていた中編読本は、この時期、既に数を減らしつつあったが、そこに読本長編化の波がおこり、種彦がこれまで関わっていた版元は、中編読本出版から離れていった。作風の上からも、また体力的にも長編読本の製作が困難であった種彦は、読本をやめて合巻へと活動の中心をうつしたと考えるのが穏当である。合巻へ活動をうつしたのは読本執筆の才能がなかったためとする、これまで定説は、もう一度考え直されるべきであると思われる。

種彦は、のちに合巻界の権威と讃えられるまでに成長したが、その素地となったのは、彼の著作活動の前半期、読本を中心とした文化年間の著作経験であるということが、本論文での考察により明らかになった。これまで顧みられてこなかった読本作品や、これを執筆していた時期の彼の交友関係を改めて見直すことは、種彦について考える上で、必要不可欠であるといえよう。

種彦は、江戸読本の全盛期に読本作家として誕生し、この時期の、いわゆる“江戸読本らしさ”を十分に吸収し、それを作品に残している。そして、種彦の読本作品には、人気を得た作品も多くある。これまでの読本研究では、曲亭馬琴や山東京伝ばかりが研究対象となってきたが、種彦も、江戸読本作者の重要な一人として、取り上げられるべきであろう。

論文審査の結果の要旨

本論文の「柳亭種彦の読本の研究」という題目は、読本研究と種彦研究、双方の研究史において、それぞれに新たな意味をもつものである。まず読本、特に後期の読本をめぐることは、従来の研究は滝沢馬琴という大作家に集中しがちであり、当時、馬琴と読書界の人気を二分した山東京伝の研究さえ比較的少なく、まして京伝の影響下に、その初期の文業として数点の読本を書いた種彦が取りあげられることは殆どなかった。また、種彦は、『修紫田舎源氏』という作品を代表作とする合巻作者として後に高名になる作家であり、それ以前の読本は、文学史上、無視にちかい扱いを受けてきた。読本と言えば馬琴、種彦と言えば合巻というそのような常識の中で、種彦の読本を研究対象とすることには、画期的な意味が認められるのである。

むしろ、誰も研究しない対象を研究することに直ちに意味があるわけではない。まず論者は、種彦の読本を京伝のそれと比較することによって、種彦の文章の特色を抽出することに成功する。江戸読本の概説（第一章）の後、第二第三章は、種彦の読本が京伝の影響を濃厚に受けることを具体的に指摘し、それと比較することによって、それが御家騒動や敵討ちなどという典型的な物語の枠組みに話を押し込めることなく、主人公の女性の生き生きとした感情を存分に描き、その感情の動きを重要な動機として物語を進めること、また時には文章に凄惨な残酷味をもつ特色があることなどを明らかにする。出典を確定し、それと比較するという、素朴とも言える方法に基づくこれらの論は、しかし作品論として十分に成功しており、種彦初期文学の骨格を浮彫りにするものとして高く評価できるであろう。

本論文のもう一つの優れた点は、種彦の日記を精読し、彼の交友関係を精査することによって、その読本の特色の由来を考え、彼が読本作家から合巻作者へと転向した理由を明らかにしたことにある。第四章は、種彦の読本を二期に分け、その後期の作品に演劇的趣向が顕著であることを明らかにした上で、種彦の当時の日記からうかがえる浄瑠璃本の耽読、さらには演劇的な要素の強い合巻を初めて執筆した経験などに、その傾向が由来することを指摘する。また第五第六章は、彼が、読本という、中国白話小説の趣向と表現とを駆使する高等小説から、合巻という、挿絵の余白に書き込まれた、仮名文による、女子供の慰みのための草紙の作者へと転じたことについて、それが従来説かれたように、種彦の学問文才の欠如に由来することではなく、一つは、彼が画師葛飾北斎を通じて知り合った西村屋与八という書肆の企画と誘掖によるものであったこと、また一つは、読本が長篇化する当時の一般的な傾向の中で、中編読本作家であった種彦の懇意の書肆が次々と中編読本から撤退していったこと、さらには病気がちであった種彦には長篇読本の製作に向かう体力がなかったこと、また演劇的作風をもつ種彦にとって、合巻が書きやすく、魅力的な書物であったことなどに原因を求めべきであることを論じる。特に作家と書肆との交友関係を考慮することは、従来にない新鮮な作家論の方法であり、当時の書肆と出版とについての詳細な調査ともあいまって、この考証に十分な説得力を賦与している。読本研究に新たな一方法を提示した研究として高く評価すべきである。

読本は、登場人物も多く、話の筋も込み入り、話は二転三転し、梗概を記すことも容易ではない。作品の特色を論じる以前に、梗概を正確に分かりやすく記すという困難がある。その点、本論文はさらなる工夫を要するであろう。

本論文は、種彦が読本の執筆をやめて合巻に専念することになった原因を考えることで結ばれており、そこでは演劇的作風が種彦の読本と合巻とを繋ぐ要素に数えられている。果して彼の合巻はどのように演劇的であるのか。また、その他の種彦の読本の諸々の特色は合巻にまで継がれているのか、その過程を最後まで追ってこそ本論文の目標は達せられると言うべきであろう。「柳亭種彦の読本の研究」から「種彦研究」へと、論者の研究が進展することを期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十七年一月二十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。